

# 幼児教育とリトミック(1)

## Rythmique in Childhood Education (1)

(1999年3月31日受理)

曾我部 司  
Tsukasa Sogabe

Key words : リズム, 反応活動, エミール・ジャック・ダルクローズ

### 序 論

ひと昔前までは近所の子供達が集まり、集団で歌遊びやリズム遊びをしている光景をよく見かけたものである。しかし、今日では子供達は各家庭に引きこもり、ゲームボーイやテレビゲームに熱中し、それ以外の時は塾通いで忙しく、集団で遊んだりすることはほとんど見られなくなった。

以前のように、子供同士で年上の子が年下の子に対し、遊びの中でいたりや助け合い、序列、といった子供の世界でのモラルを教えていたように思われる。

しかし、それが無くなった今、家庭内においてそれらをカバーする教育が成されているだろうか。親は子供の成績が上がれば良い、机に向かって勉強をしておれば満足している家庭をよく見かける。日常生活においてもハイテク時代の今日、子供達は風呂を沸かしたり、食器を洗ったり、ホウキを持って掃除をする、といった家事の手伝いをするということは皆無に近い。こういった状態で成長して大丈夫だろうか。

保育者を目指す学生が、幼稚園や保育園に実習に出た時のことを紹介してみると、まず、リンゴが剥けない、タオルが絞れない、園庭を掃除する竹ぼうきが使えない、園児のシャツのボタン付けが出来ない、洗濯機に使う洗剤の量が分からない、チューリップの球根の植え方を知らない。と、こういった具合である。(こういった例はごく一部の学生であるとは思うが)

家庭と学校の言い分も聞いていておもしろい。

親は親で、しつけやマナーといった家庭教育を学校の先生に要求し、逆に学校の先生は親に、塾へでも行ってしっかり勉強して、少しでも良い学校へ入れるよう話をする。文部省の方針も最近では、従来の知育教育偏重を改善し、特色のある生徒、心豊かな子供を育成しようとしているが、現実には甚だ疑問に感じるところも多い。

このことから、情操的で心豊かな教育法を考えようとするとき、「リトミック教育」が挙げられ

よう。

音楽と動きを融合し、音楽遊びによって身体全体で音楽に親しみ、音楽的才能を育成するのみでなく、人間性あふれる豊かな情操を育む教育法であり、音楽的な感覚や表現力を高め、人間の精神的成長に欠かせない想像性、創造性、感受性を育てようとする「リトミック」ではあるが、「リトミックと言う言葉をしていますか?」と、保育者を目指している学生達に聞いてみると、かえってきた反応は、「リトミックと言う言葉は聞いたことはあるが、実際にはその内容、教育法は知らない」という学生がほとんどである。一般の方々も大半がそのような認識ではないだろうか。

幼稚園、保育園においても盛んに音楽教育が展開されている。しかし、ただ単に歌いましょう、楽器を鳴らしましょうということだけでは、稀薄な音楽教育になってしまうであろう。

家庭においても、子供が練習しているバイエルが早く進めば良い、ブルグミュラー、ソナチネを弾き出したからといって喜んでおり、子供が何の感情もなくピアノの前に座り、音を出しておれば安心しているお母さん方も多いようです。

リトミックの創始者でスイスの作曲家・音楽教育家のエミール・ジャック・ダルクローズが6歳のとき、ピアノの先生が彼の母親に「気まぐれにピアノをいじるのをやめさせ、音階や耐えがたい曲だけを弾かせるように」と勧めるのを聞き、嫌気がさしこの経験から「子供は感受性や聴覚能力の発達に応じた音楽教育を受けた後でなければ、ピアノを弾き始めてはならない」という確信を持ったそうである。

そこで、リトミックとはどのような教育法なのか、その内容と実際のリズム的分析について一考察してみることにする。

## リトミックの外観と特色

リトミック教育は、スイスの作曲家・音楽教育家であるエミール・ジャック・ダルクローズ(1865～1950)によって1900年初頭に創案され、音楽と動きを融合した教育法である。

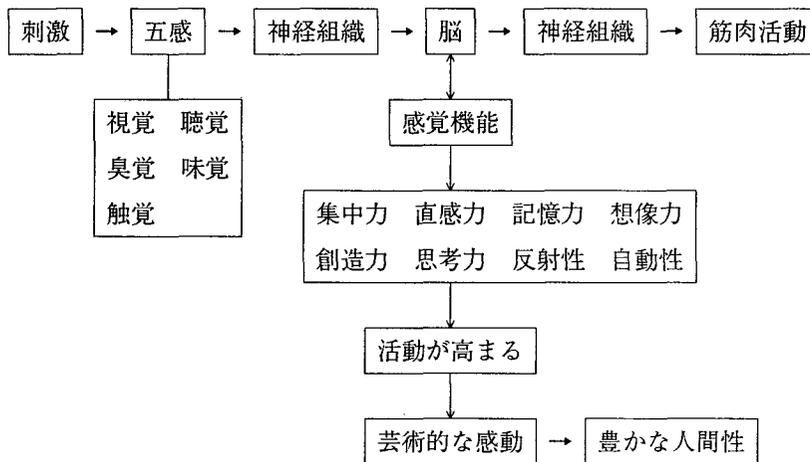
音楽をただ単に耳だけで聴くのではなくて、音楽と共に動きながら全身的に、また、全感的に音楽を感じ、表現し、育てようとするものであり、そのことによって、個人の奥深くに潜在している感性や感覚などを目覚めさせ、諸能力を開発することにもつながっていく。

リトミックでは音楽に反応して、私達の内部では、音を聞く→それを理解する→どう処理すべきかを考察する→実行に移す→実感する→評価を下す。という過程を経ることになる。

リトミックは反応活動によって展開される。

この反応活動に思考力が伴い、意識のある活動となる。思考力を伴った反応作用は、感覚機能をより鋭敏にし、集中力、直感力、記憶力、想像力、創造力を高めることになる。

これを図示すると以下のようなになる。



身体の内外的刺激を五感で受け止め、神経組織に伝わり、そこから脳へ、脳において感覚機能に作用して、刺激が適切に判断され、意識ある現象となってとらえられる。そして、また神経組織によって、その判断された現象を筋肉活動に伝え表現される。

全身的に音楽をする、感じる、ということは、身体自体が感情を直接表現する楽器にならない。

ダルクローズは「身体の運動はある意味で筋肉の経験であり、その経験は、筋肉感覚という第6番目の感性によって測定される。この6番目の感覚は、身体の運動のさまざまな度合いの活力と速さを、その運動の引き起こす感情との関係において調和させる。それは、また、人間の身体組織の全体に、感情を浄化する能力を付与することにもなる」加えて、「リズム意識は随意筋、不随意筋を問わず、全ての筋肉の協力を要求する。結局、リズムの感情をつくり出すための運動において、教育がほどこされなければならないのは、身体全体なのだ」と。

すなわち、技術的な教育を進める以前に、感覚的な教育を進め、音楽に対する敏感な感受性を養い、音楽技術に関することだけに終始する教育ではなく、創造的な教育を進め、音楽の偶然性を尊び、即興創作力を持たせる教育である。

「リトミック教育に関するすべての練習の目的は、集中力を強めることであり、身体を保持することに慣らすことであり、言わば、頭脳からの命令を実行するために、準備を整え、大きい力を保持し、潜在意識の能力を増大させることにある」とエミール・ジャック・ダルクローズは述べている。

## 動きとリズム反応

我々は、日常リズムの中で生活している。階段の上り下りや歩行をする、料理をする、人と会話をする、あらゆるスポーツにおいてもリズムは存在している。これらを上手くスムーズに出来る人

がリズムカルな人間であり、筋肉の使い方が上手な人といえるだろう。

リズムカルという、動きの中だけにおいて考えられるが、そうではなくて、喜びや悲しみ、といった精神的なものにも関係してくる。

この動きと精神が両立されると、生活そのものが順調であり、これをコントロールしていくことが大切であり、必要となってくる。この動きと精神を共存しようとする、なかなか難しい問題がある。

何かをしようとした時、頭脳で命令されたものが、中枢神経を通して筋肉を動かし、動きにつながっていく。しかし、どこかに欠陥があると、このつながりが生きてこない。

たとえば、「ボールを打ちましょう、転がしましょう」としたとき、リトミック教育では何が必要で、考えなければいけないのか、実際にボールを使って考察してみることにする。

図1のように、A～Fまでの8人が床に座る。4拍子に合わせて、丁度4拍で相手に届くように硬式テニスボールを転がすとする。

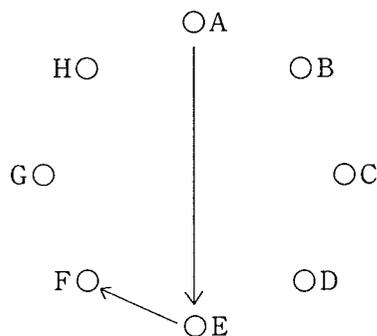


図1

Aさんは1拍目で転がし、4拍目でEさんに届くように、4拍目で受け取ったEさんは、次の1拍目でFさんへ転がすとする。ここで考えられるのが、テンポ(時間)、スペース(空間)、パワー(力)の関係である。

ここでは、テンポは常に4拍と一定しているのであるから、スペースとパワーの比例である。AさんからEさんへ、EさんからFさんへ同タイム内で転がすのであるから、スペース(空間)の大きいA→Eではパワー(力)は強くなり、スペース(空間)の小さいE→Fにおいてはパワー(力)は弱くなる。

同じボールを使って別の角度から考察してみることにする。

図2アのようにA～Hまでの8人が円になって床に立つ。

AさんからBさんへ、BさんからCさんへ、 $\nu=60$ の速さで1拍ずつボールを渡していくとする。 $\nu=60$ の速さであれば、図2アのスペース(空間)で、それに比例したパワー(力)が必要となってくる。次に、 $\nu=100$ の速さでボールを回したとすると、図2イのように、演行者が立つスペース(空間)も小さくなり、パワー(力)も弱くなる。そうならなければ不自然な動きになるはずである。これら音楽行動の3要素は常に相互関係を持ち、音楽的な動きを表現するために切り離せない存在で

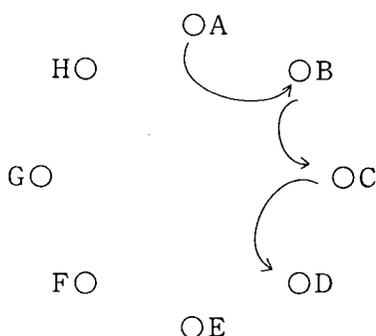


図 2 ア

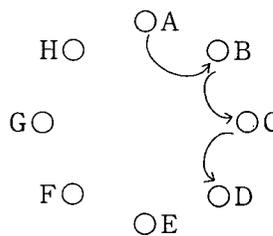


図 2 イ

ある。

したがって、下記に示すような関係になる。

テンポ	スペース	パワー
速い	小	弱
遅い	大	強

リトミックでは、以上のような基本動作に想像性が加わらなければならない。

何かを想像すると、そこには、どのくらいの強さ、速さ、空間が存在するかを瞬時に判断し、コントロールする力を養っていかなければならない。

想像性とはどういうことなのか、たとえば「ゾウ」になるとする。「ゾウ」になるには、どのくらいの強さ、速さ、空間が必要であるか、それを瞬時に感じて判断し、表現しようとする、何が必要であるかという、コントロールが必要となってくるであろう。

リトミックでは、「音」という刺激がある。「ゾウ」の音楽、その刺激を受けて頭の中でイメージをする。そして、中枢神経を通して筋肉を動かしていく。コントロールするわけである。

ジャック・ダルクローズの友人で、スイス・ロマン管弦楽団の創設者・指揮者でもあった、エルネスト・アンセルメの分析によると、「ジャック・ダルクローズは経験に教えられて、まだ知られていない感覚、あるいはまだ分析されることなく、探求されてもいない感覚、つまり彼が〈筋肉のリズム感〉と呼ぶ感覚に訴えたのであった。その働きは、普通、頭脳感覚だけに限定して考えられているのだが、私達の身体を、リズムの躍動する楽器と化し、時間の現象を空間の現象へと移し変える変圧器とするような機能をもっている。私達の存在のもつまだ知られていない知恵、隠された財産、それは今日の多くの舞踏家、オーケストラ指揮者、名匠たちが知らず知らずのうちに自分の中に伸ばしてきたものである」とされる。

この筋肉感覚を、理性で把握でき、リズムの意識を掴まなければならない。

「リズム意識」とは、物理的運動と精神的運動との関係をとらえる能力であり、更に感情や思考の刺激を、そうした運動へと伝える変化を感じる能力である。そこから「リズム表現」へと移行し、身体全体の筋肉でそれをイメージへと反映しなければならない。

## リトミックにおける協応・反応・表現

先に述べたように、リトミック教育においては「反応」ということが大切になってくる。子供達に、次は「ゾウ」ですよ、「リス」ですよと言ってしまったのでは、子供達自身がそれを想像したり、比較対照することに無理が生じてくる。

音の刺激を感じ、頭の中でどうすればよいのか、その命令が中枢神経を通して筋肉を動かすということになると、そこに想像性がプラスされてくる。これが「表現」ということになり、この「表現になる」ということが大切である。模倣するのではなくて、自分自身で「ゾウ」になり「リス」になったように動けなくてはならない。

野原があり、そこに美しい花が咲いていて、蝶々が飛んでいる、というだけでは芸術性もなく、「表現」ということにはならない。形を模倣するのではなく、野原の広さに対するエネルギー、花の美しさ、蝶々の飛ぶ様を、実際にそれがそこにあるかのごとく、表現する力を養っていくことが、子供にとって大切なことである。同時に、人間の生活の中には、機敏に反応しなければならない事、想像しなければならない事、美しいものやそうでないもの、そういうものを見分ける力、いわゆる「審美学」が必要となってくるであろう。

リトミック教育では、反応させるという教育的手段によって、心身の協応力の確立を目指している。

「リズムについての正確な身体表現のためには、実際は、リズムを知的に把握しただけであったり、リズムを表現できる筋肉組織を持っているだけでは不十分であり、想像したり分析したりする頭脳と、表現する身体の間で連絡（communications）が確立されなければならない」また、「単なる動きは無意味である。その動きに音楽が伴う事によって動きは意味を持ち、思想を表現することになるのである」と、ジャック・ダルクローズは述べている。

そして、ジャック・ダルクローズは、「すべて健康な、そして頭脳の正常な子供は、皆平等な才能を持って生まれ、音楽的才能を内面に秘めている」と言っているところから、つるはしによって、地下水に届く道を切り開き、あふれる泉、すなわち、潜在的に持っている音楽的才能をうまく引き出し、教育していくのが私達の役目であり、その適切な時期こそ幼児期ではないだろうか。

## 参 考 文 献

1. フランク・マルタン他著 板野 平訳「エミール・ジャック・ダルクローズ」全音楽譜出版社
2. 武石 宣子編著 「幼児のためのリトミックレッスン」共同音楽出版社
3. 板野 平他著 「みんなでやろうリトミック」ひかりのくに
4. 馬淵 明彦著 「リトミックについて」馬淵 明彦論文集より